ふっさ画譜 1

（画家）藤井将太郎

川辺の冬景色

福生市に住むようになったのは、昭和五十年の暮で、今から十四年前になります。

元々私は、東京の山の手で六十歳迄暮して来たので、遠く都心を離れて武蔵野の西の外れに来たとの感でした。

しかし住むにつれて此の地の美しさが心に染みて来て、とりわけ奥多摩街道沿いの欅の樹塊、冬の黄褐色の枝々と青く澄んだ空との交わり、また、多摩川の土堤と流水の間の緑生地、殊に秋から新緑の間が実に美しい。

薄か萱の群生が、狐のボアのように枯れて、穂波が風にそよぎ、榛木か、細い枝々が空に溶け入って冬の空に繊手を差しのべている可憐さ、そして中洲の土に確と喰い入った根、これ等の美しさの前に画架を据えぬ時には、一盞の酒に陶然として見入ります。

秋留台地の上に夕日が沈む迄、寒い夕風の中に……

そして新緑ともなれば滴るような緑の滴滴。今では此の辺りは私にとって、かけ替えの無い地となっています。